寺報
善巧（センケウ）

発行
〒938 富山県下新川郡
宇奈月町浦山497
白雪山 善巧寺
☎宇奈月(07656)(5)-0055

寺よみ 四月

一日 **お講** 当番 下村
九日 **うらやま日曜学校開校式** 小学一年生からのお子さん全員集合！
一六日 **お講** 当番 栗虫
この日を最後に、歩きなれたあの廊下、古い御殿のとりこわしがはじまります。古い建物とのお別れ会をいたしましょう。
一七日 建物とりこわし。建設事業スタート。
二九日 チューリップ摘みと花かざり。日校生徒とお母さんで。寺の御堂を美しい花御堂にいたしましょう。
三〇日 **花の初まいり** お寺の御堂は花いっぱい！日曜学校生徒のおつとめや、記念撮影会や境内には縁日も出て、初まいりにこられるお子さんたちを歓迎します。

善巧寺の歴史をきざんだ老朽御殿も、いよいよ4月17日に姿を消すこととなった。

花の初まいり

四月三十日午前十時

勤行・初参章拝読
法話・記念品贈呈

初まいりは、こどもが生まれたことを喜びお寺に初めてお参りをする行事です。
0歳から小学校前までのお子さんを連れてぜひどうぞ。申し込みは二十五日までにお寺へ

新らしい出発

愈々という感じです。四月の初めには、建築工事が、現実に開始されます。一世紀を閲し、「御殿」と呼ばれて来た建物も撤去されます。何十人の布教使が机に倚った控えの間も、失くなります。新らしい装いの、門徒のための法中のための「大樹の間」や「明教院の間」の誕生は、嬉しいが、私達の祖先を支えて来た古い建物への惜別の心も、胸を打つものがあります。有為転変の理は、古今到来の大原則です。「行く川の流れは絶えずしてしかも元の水にあらず」と方丈記にあります。

しかし、今は、過去への哀愁を断ち切って、到来への希望を心の支えにしなくてはなりません。「古い建物よ、さようなら。長い間、御苦労様でした」と、心からの感謝の言葉を送ろうではありませんか。

新らしい槌音が、間もなく響いて来るでしょう。この音は、単なる建築工程の出発という物理音ではありません。来るべき三法要の厳修を告げ知らせる心音です。善巧寺の門信徒凡ての胸の高鳴りの最初の告示です。

此の二ヵ年、私は、懇志の徴収という仕事に携わって来ました。徴収というよりは、お願いというべきでしょう。その結果、此処に十二冊の小冊子があります。表紙に、私の拙い字で、三法要懇志帖と書かれてあります。そして、番号が打ってあり、更に、例えば、舟見、入善、泊、八幡と書かれています。一冊は、百枚から成り立っていて、一枚一枚の右半分は「懇志受領書」左半分は「控」の形です。従って、十二冊は、二年分の懇志の受取りの控の合計なのです。併し、私には、此の一葉一葉が、心に染み通る記憶を呼び醒ます機因なのです。金壱万五千円也と書かれ、地区の名、氏名、年月日と続き、報恩講のお勤めと説教のあとで、御主人が出して下さった掌の在り方までが、思い出されるのです。或る所では、主人が急に入院したのでと、遠慮勝ちに、昨年の半分を出され、又、或る家では私が死んだら若い者が出すかどうか分らぬからと仰言って、六年間分全額を下さいます。各人各様ではあり乍ら、受取る私の方は、只お礼の気持とお願いの気持とで一杯なのです。

住職 雪山俊之

若き学僧善巧寺の嗣（よつぎ）に

空と華と

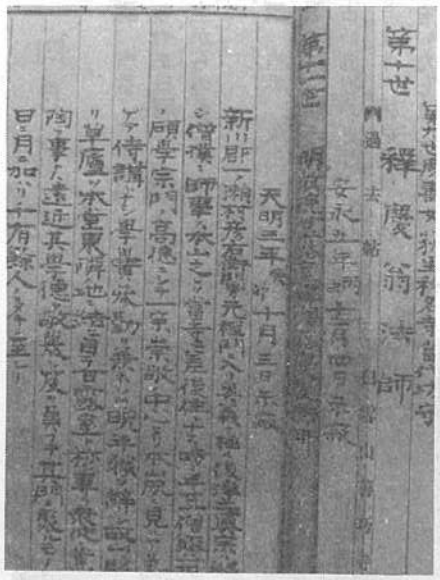
明教院僧鎔伝

恩師霊潭（れいたん）のもとで十年の間、宗学を学んだ明教院は二十一歳のとき、縁あって浦山善巧寺の嗣（よつぎ）となる。その縁というのは、およそつぎのようなことであったようだ。

明教院が上市村の明光寺で勉学にはげんでいるころ、善巧寺には第十世の住職、慶翁がいた。この慶翁には男一人、女四人の子供があった。ところが、嗣となるべき長男の証順が享保十五年十二月三十一日に不幸にしてなくなってしまった。慶翁は、あとつぎを迎えるべく、方々に手をつくした。そんなとき、霊潭師の話が耳にはいった。聞けば師のもとには、在家出身の若い学僧が四人もいる。いずれおとらぬ秀才ぞろいだというし、善巧寺のあとつぎは是非ともこの中からと考え、何度も足を運んだのであろう。

そして、縁熟して、慶翁が明教院に白羽の矢を立てたとき、霊潭師は、おそらくこんなことをいったに違いない。

「条件は一つ。若き学僧の志を折るようなことはしないでほしい。霊観（のちの明教院）は、四人の門弟の中でも、最もすぐれた男です。十年の学問ではまだまだ満足していない。おそらく、京都の本山の学林で、さらに勉強したいというはずだ。また、これは宗門のためにも、善巧寺のためにもなることだ。嗣に迎えても、彼の思いのままに、学問させてやってください」



善巧寺過去帖にならぶ十世慶翁と十一世明教院

「願うところだ。それにわたしも元気だし、ご法義繁盛のために大いに後押しすることにいたしましょう」

慶翁は事実、明教院を京都に出し、以来三十年の間、住職の仕事を一手に引き受け、明教院の志をまっとうさせるのである。

京へ第二の旅立ち

さて、善巧寺の嗣となった明教院は、慶翁とそして門徒衆に送られて京都へと、学問修行の旅に出る。ちょうど十年前、水橋の実家から上市の霊潭師のもとへと上市川をのぼったのが第一の旅立ちとするならば、十年後のこのときが、彼にとっては第二の旅立ちとなったわけである。

明教院が第二の師と仰いでいた日溪法霖の著書

しかし、その彼の胸中には、一つだけ、心残りでならないことがあった。それは、この十年間、ひそかに第二の師と仰いでいた本願寺の能化（学階の最高職）法霖師が、四十九歳の若さでなくなられたということである。

師は紀州の生まれ。十七歳で得度、二年後には早くも「選択集」の講義をして参聴の衆徒を驚かした。二十七歳のとき京都に出て学林で若霖に師事して自他宗の学を研いた。若霖はその器を愛し当時の法主寂如上人にすすめて副講とし、また自坊の法嗣とした。そして、若霖がなくなったあと、法霖は学林の能化職になった人である。

そして霊潭師が一時師と仰いだ華厳宗の鳳潭師と論争すること二年、ことごとく鳳潭の難を論破して、天下にその名をとどろかせた法霖師のことは、霊潭師から何度となく聞かされていた。だからこそ明教院は、彼を第二の師と仰ぎ、是非とも、じかに会ってその教えを聞きたいと思っていたのである。

学林で明教院を迎えたのはこの人僧撲師だった

法霖師なきあと、はたしてよき師にめぐり逢うことができるのだろうか——そんな不安のつのる明教院を、学林にあたたかく迎え入れたのは、法霖師の一の弟子、越中射水郡小泉村出身の傑僧、僧撲師であった。

寺ごよみ 五月

一日 お講 当番 音沢

この日、三法要記念の建設事業の起行式が行われます。お講のお参りをかねて、おさそい合わせの上、お集まり下さい。なお、この日から、本堂と庫裡の間の廊下はなくなりますので、お参りの方、足元は不便になりますが、よろしくお協力下さい。

一四日 うらやま日曜学校 春の野山で遊ぼう大会

一六日 お講 当番 音沢

お待ちかね、春の山菜、ウドの登場。田んぼの仕事も一日忘れて、みんなで春の香りいっぱいのおときに舌つづみを打ちましょう。

わたしたちの寺をわたしたちの手で

三法要
- 宗祖　700回忌
- 御誕生　800年
- 明教院　200回忌

春の理事会開く

3月19日

わたしたちの寺を、わたしたちの手で――という気運の高まる中で、全門信徒注目の第三回三法要理事会が、三月十九日に開かれ、建設関係の記念事業を、いよいよこの四月から、ツチ音高く進めてゆくことを決めました。

3月19日に開かれた春の三法要理事会

この日の理事会は、定刻の午後一時に開かれ、住職のあいさつのあと、三法要事務所より五十一年度の決算報告がありました。

くわしくは別表の通りですが、とくに注目すべきは、歳入の五十二年度一般懇志で、当初予算では五六〇万だったのが、門徒の方々の予想以上の協力で、六一五万九、〇〇〇円と大きく上回わったことであります。これによって五十二年度は特別懇志の窓口を開設することなく予算を超えることとなり合計一、一五万九、〇〇〇円（一五万九、〇〇〇円の増収）になりました。

一方、支出面では、教化伝道費にかなりの費用がかかりましたが、これも法要や催し物当日の懇志でカバーすることができ、教化委員一同「門徒のご理解あってこそ。ありがたいこと」とよろこんだことであります。

そして、総務関係では、なんとかして、予算以下におさえようと再三再四行われた会合の費用を出来るかぎり切りつめて、一七万七、九〇〇円の黒字にこぎつけました。

つぎに建設費ですが、これは昨年は補修工事だけにとどめたため八九八万六、〇〇〇円の残となり、総務費と合わせて九三二万二、九〇〇円を五十三年度予算に繰り入れることにしました。

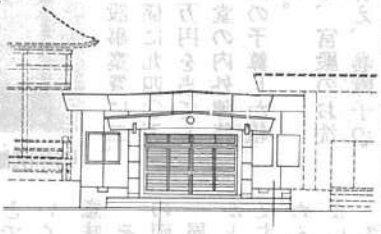
建設事業四月スタート

会議は決算報告のあと休けいに入り、この間に、本山御助成の会計係に尾沢初雄、本波光雄の両氏を選びました。

このあと再会された理事会で、建設委の東狐幸一副委員長から、四月よりはじまる建設事業計画の説明がありました。

これによると、事業決定を委託された建設委では、二月に会合を開き、私たちの寺を私たちの手で、と、門徒の中の建設関係者に三月十一日の寺の太子会に集まっていただき、計画の発表、説明をしたあと、十八日に四人の業者による入札を行い、うち、最低価格一、八四九万五、〇〇〇円で落札した浦山の建設業、本波孝さんに今回の工事一切をおまかせすることになりました。

出席した理事たち



は「建設予算一、九〇〇万円以内でおさまったのは業者が門徒の方だったればこそ」と感激、これをよろこびのうちに了承しました。

このあと引き続き、五十三年度予算の審議に入り、別表の通りに決まりました。この中で、建設費は、一時借入れしなければなりませんが、これに関しては監事の尾沢初雄氏に一任することになりました。尾沢氏は「借入金はすべて銀行や農協というのではなく、理事の中でも肩がわりしてやろうと思われる方もおられるはず。その方は私に是非御一報を」とのことでした。

このあと、寺から特別懇志の窓口をこの四月から開くとの発表があり、これに関しては次のページにくわしく説明させていただきます。

三法要特別会計 52年度決算報告

〈歳　入〉

①一般懇志51年度繰入金	5,000,000
②一般懇志52年度分	6,159,000
合　計	11,159,000

〈歳　出〉

1.教化伝道費　予算 200,000

☆催し物当日懇志収入		206,800
5月	○教化資料	19,000
	○初まいり準備金	34,700
	○マイク設備	75,100
	○写真代	26,000
	○法要費	10,000
	○会合、雑費、通信費	10,000
7月	○日曜学校準備費	15,000
	○教化資料	30,500
	○オルガン	33,000
8月	○盆踊り準備費	75,000
	○電気工事費	13,000
	○日校遠足電車代	25,000
	○日校雑費	1,500
9月～1月	日校雑費	9,000
1月	正月施本	15,000
2月～3月	日校雑費	15,000
小　計		406,800

2.総務費　予算 800,000

4月	○事務通信費	74,000
	○寺報2号合併号	40,000
	○会費	10,000
5月	○雑費	97,000
6月	○会合金	25,000
	○建設準備金	100,000
	○寺報3号	40,000
8月	○会費	14,000
10月	○寺報4号	40,000
12月	○会報5号	40,000
3月	○太子会準備費	10,000
	○建設合併費	28,600
	○雑費	50,000
	○会合事務費	50,000
	○通信	3,500
小　計		622,100

3.建設費　予算 10,000,000

6月	○補修工事	954,000
	○カベ工事	60,000
小　計		1,014,000

支出合計	**1,836,100**
①教化費（予算内より）	200,000
②総務	622,100
③建設	1,014,000
52年度収入	11,159,000
52年度支出	1,836,100
残金総額	**9,322,900**

三法要特別会計 53年度予算

〈歳　入〉

1.寺院収入

①52年度繰入金	9,322,900
②53年度一般懇志	6,000,000
③雑収入	77,100
④借入金	4,600,000
合　計	20,000,000

〈歳　出〉

①教化伝道費	200,000
②総務費	800,000
③建設費	19,000,000
合　計	20,000,000

倶会一処のよろこびを内陣法名で

特別懇志一口五万 四月より開設

明教院僧鎔師と共に、倶会一処のよろこびを——と、浦山善巧寺では五十七年にお迎えする三法要を記念して、この四月から、本堂内陣余間に、門徒の方々の法名をかかげるという画期的な事業をすすめることにいたしました。この〝内陣法名〟は特別懇志一口五万円につき一人の法名を、内陣法名軸に記載するというもので、これまでとかく遠い存在であった寺の内陣を、門徒の方々に身近に感じとっていただこうというのがネライです。心のふるさと善巧寺に、さらにもう一つ、倶会一処のよろこびの場が誕生するわけで、心ある門徒の方々のふるってのご参加を切に要望する次第であります。

極彩色の善巧寺内陣余間——ここに門徒の先祖の法名軸を安置します。

この〝内陣法名〟の計画は、昨年春に三法要事務所が開設されて以来、検討に検討を重ねられていたものであります。と申しますのは、五十七年にお迎えする三法要に関して、わたしたちは二つの大きな問題をかかえていたのです。

その一つは、資金面の問題です。総額三、八〇〇万円の予算を立て、現在、門徒の方々のあたたかいご協力のもとに進められている募財計画が、このまま順調にいって、果たして、どれほどの事業が可能かということであります。この四月から着工される建設事業費に二、〇〇〇万円、総務関係に九四〇万円、教化費に一六〇万円を当てるとすると、大切な本堂の内外陣修復には、七〇〇万円の子算しか組むことができません。

明教院僧鎔師の絵像と共に……

ところが、ご本尊、宮殿のお洗たく、金箔の貼り替え、巻障子の修復、それに外陣の戸障子、壁などの修理、改装をふくめますと、ざっと見積っただけでも建設費と同額の二、〇〇〇万円にのぼります。これをすべてやりとげるかどうかは別としても、とにかく本堂の修復費にはかなりの資金が不足してくるわけです。

このようなことから、全門徒の方々への毎年のかかり銭とは別途に、特別懇志の窓口をどうしても開設しなくてはならないと思っておりました。ありがたいことにはすでに、その意をお汲みいただいてか、前卓や金箔等の寄進をとおっしゃる方も出ておりました。寺としては、これをしばらくお待ちいただくことにして、三法要事務所の特別懇志計画の出来上がるのを待っていたわけであります。

一方、もう一つの大きな問題として、門徒の方の印象として、法要といえばすぐに金ということになり、これをくり返していては、おそらく寺と門徒の距離感が遠くなるばかりではないか、ということであります。これであっては、いくらりっぱな法要をつとめても意味はありません。

そんなことから、教化と総務との両面で、寺と門徒の関係をより一層密接なものにはできないものかと、およそ一年にわたって、相反する二つの問題を、一つにまとめる方法について、検討を重ねてまいったわけであります。

さて、今回、四月からスタートします特別懇志——〝内陣法名〟はこうしたことに由来するもので、懇志を出された方が、寺との距離感を感じないよう、さらに身近なものに感じとっていただけるようにと計画されたものであります。

法輪寺の寺宝——明教院自筆の書

本山の〝院号〟をさらに具体的にあらわしたものといってよく、現在の寺の内陣東の余間に、明教院僧鎔師の絵像を安置し、これとともに一口五万円の特別懇志をいただいたお方の先祖の法名を、法名軸に記載させていただくわけです。祠堂経やお盆にお寺参りをされれば、法名前でお焼香をしていただくことにもしており、明教院とともに倶会一処のよろこびを分かち合えることと思うわけであります。強制はいたしませんが、是非意のあるところをお汲みとりいただいて、一口でも二口でも、三口でも、今回の特別懇志——〝内陣法名〟にご協力下さるよう重ねておねがいいたします。

◇ ◇

なお、この懇志のお扱いとして内陣法名以外にもう一つ、現在、法輪寺（高島さん）の寺宝として保存されております、明教院自筆の書「今乗二尊教」の写し一幅を差し上げることにもしております。

お申し込み受け付けは四月十六日よりはじめさせていただき、内陣法名は先着順で記載させていただきます。もちろんこの計画は、この場かぎりのものではなく、末永く続けさせていただき、永代繧堂扱いといたしますことはいうまでもありません。

あらエカッタヤ 春の彼岸の本山参り

おなじみの春の本山参拝に、三月二十日、浦山・善巧寺から二十四名が参加しました。

親鸞聖人の御誕生の地、日野の里、出家の寺青蓮院、修行の地比叡山、そしておなくなりになった角の坊、お墓の大谷―と、聖人御一代の御旧跡めぐり。さらには明教院さまのお墓参りや彼岸法要のご縁にあわせていただき、おまけに三千院、二条城、嵐山と見てまわって、すばらしい心の洗たくをさせていただいたことであります。

ハトの飛び交う春のご本山

お骨を胸に大谷で

明教院のお墓の前で

京都大原三千院

秋はいよいよ明教院のゆかりの地へ

住職日記

三月十八日　土曜日　曇

彼岸の入り。十二、十三、十四日の雪が、残雪に上積みされて、裏庭は、未だに白一色である。昨日は上げ法事2。明日は、自宅法要2と、三月は、法要月の上に、親族の冠婚葬祭にも顔を出さねばならず、私の手帳に空白が無い。本日の項には、一時本山助成会準備会。六時入札と誌されている。

娘は、朝から、料理の買出し、広間の掃除、ストーブの灯油入れと、バタバタと動き廻っている。三月二十七、八両日の本山御助成が、善巧寺の当番に当たっている。生地順昌寺、荻生称名寺、若栗発願寺、真照寺の四ヵ寺の住職、世話方に列席懇請のTELをしたが、称名寺、真蓮寺住職からは、欠席の報告がある。何処も、法務多端の模様だ。

一時定刻参集者は、組長及び各寺の世話方計十名。世話方は、殆んどが、七十才を越す高令者だ。此処十年、下三日講助成会の世話役の物故者が相次ぎ、その度その度の後継者の補充が不完全のため、残るは、ベテランの高令者のみという次第。善巧寺もその例に洩れず、殊に今年は、手錬の書記役が、中央病院に入院というアクシデントで、早急に補充を考慮しなくてはならない。組長の説明も、専ら、新旧交代の人的構成と、民主的運営の示唆に限定される。簡単な酒肴の接待。半ば無礼講の中に話柄となるのは、転機に差しかかっている寺院運営の苦労話である。

来客を送り出すと、入札という緊急事項が控えている。前回、鉄筋庫裡の場合の昭和三十八年三月は、大手建設業者に落札だったが、今回は、指名を、善巧寺門徒に限っているので、緊張の中にも、違和感は見えない。それでも、此処十日間、夫々の方々は、材料、工賃、其の他の計算に忙殺だったと思う。大きな綴りの設計書、仕様書は、素人の私にも、物々しく写る。

入札の仕来たり、使用されるテクニカル・ターム。司会者の物慣れたリードに、一、八四九万五千円の落札が滞りなく決定して、全員ほっとする。蒲鉾を肴に酒の場となり、大勉強の価格を悦び乍ら、今後の工程の下相談などに入る。

仕事を手に入れた人、惜しくも少差で失った人、立場が異っていても、代々の善巧寺門徒であることに違いは無い。緊張の後の何となく、胸温まるシーンの展開に、今後の建築の前途に明るい展望を予感する。

客を送り出して、もう一度落札と価格の一、八四九万五千円の重みをずっしりと感ずる。

ストーブの燃えて
男の集いかな

辛（しん）切れの掌にチョーク持ち
数字書く

寺ごよみ　六月

一日　お講　当番　東狐・上野
四日　うらやま日曜学校
十日　六輔七転八倒・落語会

善巧寺初の催し。永六輔さんと江戸の落語家　入船亭扇橋師匠らを招いての野休み落語の会です。当日の入場料は無料。そのかわり、一席ごとにザルをまわして〝さい銭〟を集めます。笑った人、ようこそと思われる人は、どっさりザルに入れてください。永さん達の足代はこれでまかなう事にしています。

和国の教主聖徳太子をしのぶ

門徒の職人さんも一堂に

聖徳太子の御遺徳をしのぶ「太子会」が、三月十一日午後一時から善巧寺でつとめられ、はじめての催しに多くの参拝者があつまりました。

この日は、太子ゆかりの門徒の職人の方たちにもお越しいただいて、奉讃太子和讃のおつとめをしたあと、住職、若院から太子讃嘆の法話があり、つづいて、私たちの寺を私たちの手でと、三法要記念の建設事業計画を披露。大工、職人さん達は設計図を真険に検討されていました。

この催しが縁となって、法要の建設事業が四月からスタートすることになったわけで、寺ではこれからも年中行事として催させていただくことに決めました。

門徒の職人さんもあつまって3月11日に勧められた善巧寺の太子会。
この日を期して、寺の建設事業はよろこびの中にスタートを切りました。

ひとロお作法

仏壇の意義

◎仏だんは、わたしたちをお救いくださる如来さまを礼拝するために安置するものです。うちに亡くなった人がいないからまだいらないと考える人がいますがこれはまちがいです。

◎仏だんは死者のためのものでもなく、また位はいを置く場所でもありません。日々を生きる力のもとである如来のお慈悲に、わたしがあう場所なのです。

◎家族のひとりひとりが偉いものになっていては、家庭はとかく円満を欠きますが、仏前に謙虚に座して如来の大悲を仰げば、みずからの姿を知らされ、心が明るくひらけてくるでしょう。

◎ですから仏だんは、わたしの心の鏡であり、生活の鏡でもあるわけです。美しい仏だんは真実なる国、お浄土のまねごととしてつくられています。その仏だんを仰ぎつつ、わたしたちも、浄土のまねごとをさせていただこうではありませんか。

うらやま野休み落語の会

六輔七転八倒

この顔ご存知？　そうです。浅草は最尊寺、お東の寺の次男坊、かの有名な永六輔さんです。

その永さんが、縁あって、この六月十日、浦山、善巧寺にこられます。田んぼが終わってひと休みという皆さんに、腹をかかえて笑っていただこうと、江戸の落語家を引き連れて「六輔七転八倒・うらやま落語の会」を催されるのです。主催は宇奈月夢を語る会と、善巧寺教化委員会。開演は午後六時から寺の本堂で。

さて、何がとび出しますか……お代は……そうそう、お代は見てのおかえりです。おさい銭をどっさり持って、お越し下さい。

六月十日夕方六時より

善巧寺の御堂で開演!!

御恩報車第2号！

お寺の車が変りました

二年間、雨の日も雪の日も精一杯走りつづけてくれた寺のクルマ〝御恩報車〟第一号車がとうとう寿命つき、この四月から第二号車にかわります。今度は四八年型のトヨタで、お世話下さった門徒の上坂さんの話では、「五年は大丈夫」とのこと。一号車よありがとう。二号車さん、よろしくね。

現在帖を忘れずに

一月号の寺報でお願いしました門徒家族の現在帖、只今百軒ほど回収できました。これを見ながら四月に小学校へ入学する方達にお祝いのメッセージを贈らせていただきました。全部あつまればお年寄の誕生祝いもと考えています。まだの方は、どんな紙にでもけっこうですから、保険証と同じように家族の名前、職業、通学先、生年月日を書いて、寺まで送って下さい。

合掌

先日、魚津市内にある小学校へ講演にまいりましたところ、そこの校長先生がPTAのお母さんたちを前にして、こんなことをおっしゃいました。

「みなさん、よろこんで下さい。新しい体育館の完成が、卒業式に間に合いました。」

みんなホッとした表情。そこでもうひとこと。

「つきましては新しい体育館の落成式もさることながら、あと一週間ほどでとりこわしになる古い体育館とのお別れ会を、全校児童ですることにいたしました。当日は全員ぞうきんを持ってきれいに古い体育館をそうじして、雨の日も雪の日もおかげでありがとう。さようならといって別れたいものです。」

心ゆさぶられる思いがしました。わたしたちも、目の前から消えてゆく古いものたちに、おかげさまでありがとうといわせていただかなくてはいけませんね。古い家、古い道具、古い着物、古い人……よびもどしましょう。おかげさまの心を——。